# マスク・トリック／ニュー・サイド

パリジェンヌ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マスク・トリック／ニュー・サイド

【Ｎコード】
Ｎ２７００Ｍ

【作者名】
パリジェンヌ

【あらすじ】
パリジェンヌ先生の作品の中でも特に人気の高かったマスク・トリックをパリジェンヌ先生本人がリメイク！
男子校白鳩高校生、中島田熊たちは修学旅行で無人島を訪れるが彼らを待ち受けていたのは想像を絶する惨劇だった！
青春がマスクで覆われる恐怖のスリラーストーリー第２弾！

## 男子校白鳩高校3年M組生徒紹介

筆・下岡

中島田熊
クラスの中心的存在
性格は明るく常識的

中村希
田熊の親友
天パで貧血だが頭が回る

薄井直哉
いつもマスクをしている変わり者
長身でスネ毛がＡｍａｚｏｎ

直木太志
名前同様体型は太い
食べることが大好き

森間和也
坊主でマッチョ

高山剣
ビビりで地味なやつ
しかしなかなか気のきく発言をするため隠れファンも多い

カン・チャン
中国人の留学生

頭が回り行動的だが片言

西村美野流
クラス委員長
いつも適当で何を考えているのか良くわからないがたまに鋭い発言をする

下岡好痔
変わり者ばかりのクラスを受け持つ担任
爽やかな外形にふさわしい優しさに加え時折みせる厳しさはいつも生徒のことを思いやっているからこそ
生徒の変化には常に敏感で生徒たちへの気配りを忘れない教師の鑑のような存在
担当科目は英語で生徒と一体となって行う授業は解りやすい、楽しい、先生カッコイイなどととても好評であり彼を白鳩高校のピアース・ブロスナンと呼ぶ声もちらほら
こんな下岡先生を頼りに相談を持ちかけてくる生徒は後をたたない

# プロローグ

オハヨ！オハヨ！オハヨ！オハヨ！
「んん・・・」
目を覚ますと昨日４時半にセットしておいた目覚ましが鳴っていた
この目覚ましは今ＣＭで引っ張りだこのインコ、おかめちゃんを模した物だ
僕はおかめちゃんを止めようと手を伸ばしたが、うっかりおかめちゃんを落としてしまった
オハヨ！オハヨ！オバァガシャン！
僕は朝から不吉な物を感じた気がしたが、気にしないようにして折れた首をゴミ箱へ放り込んだ
それもそうだ
なんたって今日は待ちに待った修学旅行の日なんだ
僕は急いで着替えと歯磨きを済ますと家を飛び出し自転車に飛び乗った

# 僕の名前は中島田熊

僕は自転車に乗りながら朝食を食べなかったことを後悔していた
僕の名前は男子校白鳩高校３年生、中島田熊
この学校は生徒が１００人に満たない小さい学校なので来年には廃校になることになっている
先生たちはそんな高校最後の年にいっそのこと記念に大きな旅行をしようじゃないか、ということで修学旅行が決定したのだ
目的地は無人島だ
誰もいない島でクラスメートたちと３泊４日も過ごすなんて考えただけでワクワクしないかい？
まあ、本当はダイヤモンド・レイクという有名なキャンプ場に行く予定だったんだけど予算が・・・ね
さて、学校に着いたぞ
「おはよう」
担任の下岡だ
「おはようございます」
「お前が最後だぞ、さっさとバスに乗れ」
早めに来たと思ったんだけどな、僕は下岡に促されるままバスへ乗り込んだ
あとはこのバスで海に行くだけだ

## ゲロリスト

「よっ」
薄井が挨拶をしてきたがそれをシカトして自分の席へ座った
「おはよう」
寝起きなのかボサボサ頭の希が僕の隣だ
「おはよう」
僕が挨拶を返すと同時にバスが動き出した
うっ・・・なんだこの臭いは！？
僕が後ろを振り向くとそこには朝っぱらから牛丼をつつく直木の姿があった
「食いたいのか？やらねーよ！」
「うるせーデブ！」
僕はそう返すと座り直した
「粉塵お願い！あっありがと！」
「ちょっ当たり判定おかしいだろこの尻尾！」
隣でゲームをやりながら騒いでいるのは高山と西村だ
そしてその後ろで黙々とダンベルを上下させているのが森間
その隣で音楽を聴いているのがカンだ
「やっぱりハチャトゥリアンはいいアルね～」
「やれやれ、相変わらずのやつらだな」
希が呆れるのも無理はない
「俺はちょっくら二度寝でもするから着いたら起こしてくれ」
「うん」
そう答えた僕もなんだか眠く・・・ん？
前の席の下岡が僕の席に乗り出してきた
「うぷっ・・・悪いけどビニール袋とか・・・ない？」
「んーちょっとないです」
「だ・・・誰か・・・持ってウォボロロロロロロロロロロロロロロロ」

！？！？
下岡の野郎僕と希に向ってゲロりやがった
「くっくせぇぇーーーー」
「下岡ぁぁぁあああああ」
「ざっけんなコラァァァァ」
「飯がまずくなんだろボケェ」
数々の罵声が下岡に浴びせられる
「・・・ごめぇっぷ」
下岡はそういうと下を向いて黙り込んでしまった
僕はゲロを拭きながら騒ぎに気付かず希が寝続けていることに気がついた
はぁ、先が思いやられるな・・・
下岡のゲロによって大惨事と化したバスは着々と目的地との距離を縮めていた

## そして無人島へ　～ゲロリスト再来～

バスが止まった
「着いたようだな」
いつの間にか起きていた希が言った
「ここからあのボートに乗って行くわけだな」
直木が指した先にはボートというよりもヨットのような大きな船があった
「ウヒョー！すごいアルね！あんな船来日した時以来アルね！」
カンも思わず興奮する
「お前ら何勘違いしている？」
すっかり酔いから覚めた下岡が冷めた声で言った
「着いてこい」
下岡に着いていくとそこにはボートというよりイカダと言ったほうがしっくりくるようなボロイボートが2隻あった
「さ、いくぞ」
下岡が颯爽と乗り込む
「マジかよ・・・島に着く前に沈むんじゃ・・・」
高山が不安そうな顔をする
「早くしろ、置いていくぞ！」
下岡が怒鳴るので僕らは仕方なしにボートに乗り込んだ
片方のボートには、僕、希、カン、薄井、下岡が乗った
もう片方には直木、高山、西村が乗った
後者のほうが人数が少ないのはもちろん重量の問題だ
ん？ああ、森間は筋トレのために泳いで向かうらしいからボートには乗っていない
そしてボートは無人島へ向けて動き出した
「ふぅ～風が気持ちいいな～」
僕は立ち上がり両手を広げた

「おいおい、バランスを崩して落ちたらどうすんだ」
希が注意する
「大丈夫さ」
「ったく、俺はまだ寝足りないから寝させてもらうぜ」
まったく、希のやつはよくこんな揺れの激しいところで寝れるなあ
すると顔を真っ青にした下岡が話しかけてきた
「なあ、ビニール袋ない・・・？」
「いやだから持ってな・・・」
そう言いかけた瞬間僕の頭に嫌な予感がよぎった
「薄井！マスク貸せ！！」
僕はそういうと薄井のマスクを剥ぎ取り下岡へ装着した
「うわっなにするやめゥボロロロロロロロロロロロ」
薄井のマスクで下岡の口を押させゲロが外へ出るのを抑えたため被害は最小限で済んだ
「見えてきたアルね」
顔面をゲロまみれにした下岡をよそにカンが言った
「あれが・・・」
僕らの目線の先には巨大な無人島がそびえていた
僕は希を起こそうと思い、ふと海を見るとそこには華麗なバタフライをキメている森間の姿があった

## 仮面館

「ふー、やっと着いたぜ」
カルピスの原液を片手に直木が言った
「あの丘の上にあるのが俺らの泊まる館だ、着いて来い」
下岡が顔を拭きながら歩き出した
ここから見る限りではなかなか大きくて立派な館だ
1人1部屋というのもうなずける
キャンプ場がダメだったのによくここに泊まる資金があったな
などと考えているとあっという間に館についた
「おかしいな、執事が出迎えてくれる手筈なんだが」
下岡が困惑していると西村が叫んだ
「たのもーう！誰かいませんかー！」
しかし返事はない
僕は巨大な扉を押したり引いたりしたがびくともしなかった
「困ったな・・・」
僕が再び扉に手をかざそうとした時大きな扉が音を立ててわずかに開いた
そこには顔を半分だけ覗かしている気味の悪い男の姿があった
「どなたですかな？」
「あっ、あのその・・・」
下岡は男の気味の悪い身なりに怯んだのかオドオドしている
「修学旅行で来たアル！」
下岡の代わりにカンが答えた
すると男はさっきまでの警戒心を嘘のように取り払うと扉を開けた
「仮面館へようこそいらっしゃいました、私は執事の鈴木M勇介と申します」
「M？」
直木がもっともな疑問を投げかけると彼は答えた

「私はハーフなのでミドルネームですよ、どうぞマルコスと呼んでください」
僕たちはマルコスへ案内され館の中へ入って行った
時刻は正午を回っていた

「それにしてもデカイ屋敷だな」
希が僕に関心したように言った
「そうだね、なんでも昔は劇場だったらしくてそれが潰れた後マルコスの親戚が買い取ったらしいんだ」
「へえ、お前詳しいな」
「さっきリビングで下岡が知識を自慢してたろ、まったく希は寝てるんだから」
「ふん、俺は旅行が楽しめればそんなことはどうでもいいのさ」
ごもっとも
「さて、ここが僕の部屋か」
僕がドアを開けるとそこには海パンとゴーグルを装着したボディビルダーがいた
!?!?
僕が茫然としていると後ろから希が言った
「名札をよく見ろ、ここは森間の部屋だ」
「え?あっ」
ドアを見るとそこには森間和也様と書かれた名札がかかっていた
なんだびっくりした、ゴーグルしてるからわからなかったじゃないか
「それに俺らの部屋は2階だ」
僕は希についていくと今度こそ部屋にたどり着いた
夕食までは自由時間だ
僕はとりあえず皆が集まっているだろうロビーへ向かった

## マスク・ホテル

ロビーへ向かうと何やら皆が騒いでいた
「どうしたんだ？」
希が聞くと高山が答えた
「どうしたもこうもないよ、見ろよこれ」
高山が差し出したのは1枚のメモのようなものだった
そしてそのメモにはこう書かれていた
”コンヤ　コノナカノ　ダレカガ　シヌ”
「・・・なんだこれ」
希が気味悪そうな顔で呟いた
それもそうだ
なんせこの文章は血のような真っ赤なインクで書かれていたのだ
「イタズラにしちゃタチ悪いな」
薄井が言った
「せっかくの旅行なんだし犯人探しはやめて楽しもうぜ、きっとそいつも反省してるさ」
西村の言うとおりだ
「そうだな」
そう言った僕はふと気になったことがありマルコスに尋ねた
「そういえば、なぜこの館は仮面館というんですか？」
「ふふ、気になりますか、いいでしょう、教えてあげましょう」
そう言うとマルコスは気味の悪い声で語りだした
「私が昔仕えていたご主人様はある日顔面に大火傷を負ってしまいました、その顔のせいで自分の殻にこもるようになってしまい、ついにはこんな無人島にある館を買い取って暮らし始めたのです」
皆マルコスの妙に迫力のある語り口に聞き入っていた
「しかしご主人様はこの屋敷に移ってから仮面を被るようになったのです、それはご主人様の醜い顔を隠すためでしたが、それはご主

人様の心までを隠してしまったのです、そしてご主人様は遂に自ら命を絶ってしまいました・・・」
「そんな話が・・・」
僕は思っていた以上の重い話に絶句していた
「それでこんなに面白い仮面がいっぱい飾ってあるアルね～」
そういうとカンは壁に掛けてあった仮面をつついた
言われてみれば廊下やロビーの壁のいたるところに色んな仮面が掛っている
「これは全てご主人様のコレクションでしてね、遺書に書いてあった通りこの館ごと私が管理しているのですよ、館の名付け親は私です」
マルコスはそういうとキッチンに姿を消した
「なるほどね、どうりであのボロ高校がこんなデカイとこに来れたわけだぜ、いわく付きとはな」
直木が本日４袋目のポテチを片手に下岡を睨む
「いっいやぁ～知らなかったな、あっはは」
下岡はそう言うと足早に自分の部屋へ退散した
「仮面館・・・マスク・ホテルか」
薄井が呟いた
僕はロビーで一番目立つ３種類の仮面を見つめた
なんだか嫌な予感がした
これから何か起こってはならないような何かが起こるような
何か大変なことに巻き込まれるような気がした

## 食前の思惑

夕食まではしばらく時間があるので僕は希と一緒に無人島を探検することにした
島と言ってもそこまで大きなものではないので夕食には間に合いそうだ
「探検つっても地図があるわけじゃないしな、とりあえず一周するか」
僕は希の提案を採用し島を回ることにした

「くそっ田熊のやつ俺のマスクをゲロまみれにしやがって！」
薄井はひとり言を言いながらマスクをひたすら洗っていた
「くそ！くせえ！クソ岡が！」
俺はそう叫ぶとゲロまみれだったマスクをゴミ箱へ叩きこんだ
まあ、マスク・ホテルってくらいだからマスクの1つや2つくらい置いてあるだろう
マルコスさんに言って貰うとするか
確かキッチンで夕食の準備をしているはずだ
ちょっくら行ってくるか

はたして今夜の夕食は何なのか
直木はベッドに横たわりチョコバー片手にそのことだけを考えていた
メニューは？和食？洋食？デザート付きか？
量はあるのか？おかわりできるのか？
これは重大な問題だ
俺の今後に関わってくる
量がなかったときのために腹ごしらえをしておくか？
頭を使ったらなんだかノドが渇いたな
とりあえずこのレトルトカレーでノドを潤すか

それからキッチンへ行ってメニューを確認しないと
あわよくばつまみ食いなんて・・・グヘヘ、ゲエップ
「なかなかいいホテルで安心したぜ、支払いはカードが使えるかな？」
俺は下岡
この館に泊まっているクールでダンディなナイスガイだ
「さて」
俺は片手で爽やかにネクタイを緩めるとシャワー室へ向かった
食前に汗でも流すとするか
「食前のシャワーこそ至高の時間だ、一日の疲れが吹き飛ぶよ」
独り言のように聞こえるがカメラがあったら俺はまさに俳優さ
下岡はそう言うとシャワーのノズルを回した
「ふぅ、疲れが吹き飛ぶぉっつううううう！！」
温度がＭＡＸになっていたのだ
火傷した俺は氷を貰うためにヒリヒリする顔面を押さえクールにキッチンへ向かった

「風がないお前何てただのトカゲなんだよっコラ！」
「剣、尻尾頼む」
「オーケイ」
「うおっ逃げられた！撃退かよ！」
カンが西村の部屋の前を通ると高山と西村の声が聞こえた
さしずめまた2人でゲームでもやっているのだろう
僕は今館内を探索している
部屋の中にまで仮面があるからおかしいと思って調べてみたら、案の定仮面の目が隣の部屋からの覗き穴になってやがる
隣は空き部屋だからよかったものの、あの胡散臭い過去話に加えチープな仕掛け
この館とあのマルコスとかいう奴には何やら裏がありそうだな

もう少し調べてみる価値はありそうだ
とりあえず、もう夕食の時間だ
僕は階段でウサギ飛びをしている森間を尻目にロビーへと向かった

## ディナー・タァイ（前書き）

この部を書いた日は雨が土砂降りで雷も物凄かったんです
俺ん家は祖母の家ということもあり玄関が引き戸でガラス付きなので外が見えるんですよ
その日の夜、俺が玄関の前を通るとインターホンが鳴ったんです
こんな日に誰かな？
と思い振り返って外を見ると誰もいないんです
ちょっと怖かった
こんな話書いてるから呪われたのかな？
実話ですよ

## ディナー・タァイ

「期待はしていなかったが、特に目ぼしい物はなかったな」
希が不満そうに言った
「そりゃそうだよ、小説じゃないんだから」
僕はそう言ったが希は不満そうだった
「だからって倉庫と緊急ボートだけってのは物足りなさすぎるだろ」
「まあまあ、屋敷の中に面白いものがあるかもしれないだろ？」
僕らはそんなことを話しながら屋敷へと戻っていた

「すいませーん」
俺はキッチンへ向かって叫んだ
すると薄暗いキッチンの中からぼんやりと浮かび上がるようにして
マルコスさんが現れた
「薄井様、なんでしょう？」
「あの、マスクがダメになってしまったんで、よかったら貰えない
かと思いまして・・・」
薄気味悪いマルコスさんを前にして今さらながら気が引けてきた
「マスクなら料理に使うので沢山あります、どうぞ」
マルコスさんはそう言うと自分の着けていたマスクを外し俺に差し
出した
「あ、ありがとうございます」
俺はそういいマスクを受け取ると自分の名札の置かれている席に着
いた

俺が部屋から出るとキッチンからの匂いが漂ってきた
ふん、メインディッシュはハンバーグか
有りがちだが、まあ無難なところだな
スパイスはナツメグにシナモン

隠し味には生ショウガにバジル、ブランデーってとこか
ソースはデミグラスと和風の2種類
前菜はレタスとタマネギのサラダでドレッシングはシーザーと和風の2種類
スープだけがコーンにコンソメとクラムチャウダーの3種類のようだな
そして肝心のデザートはバニラアイス
これはもう少しひねりが欲しかったとこだな
マヨネーズとチョコレートソースを持参しておいて正解だったぜ
他には・・・
俺がキッチンへ向かいながら物思いにふけっていると後ろからカンの声がした
「直木～一緒に行くアル～」

俺はキッチンへ駆け込むと叫んだ
「こ、コロリ！・・・氷！」
「これはこれは下岡様、火傷ですか」
マルコスはそういうと落ち着いた様子で氷をビニール袋に詰め下岡へ渡した
「わ、わりがと」
俺はそう言うとヒリヒリと痛む顔面に氷を当て席に着いた
すると既に到着していた薄井が話しかけてきた
「先生！どうしたんですか！？」
「いやあ、日焼けしてしまってね、俺の肌はデリケートなんだ」
ふう、なんとか上手い言い訳を思いついたぜ
「大変ですねえ、そうだ！先生もマスクをしたらどうです！？」
なんなんだこいつは
俺の美顔をそんな汚らしい布で覆ってたまるかボケ
「ははは、考えておくよ」
俺がそう答えると同時にカンと直木が現れた

「ヤバイな遅刻だ、俺らの分が直木に食われちまう！」
希は館に着くなりそう言うと早足でロビーへ向かった
僕もつられて早足になる
食前の運動は好みじゃないが、夕食がなくなるとなると話は別だ
「秘薬ある？」
「あーグレートでいい？」
僕が足を緩めふと声のした部屋を覗くと中にはゲームをしている高山と西村がいた
「おいおい、もう夕食だぞ」
希が呆れたように言うと2人は驚いたように時計を見た
そして僕らに合流すると4人でロビーへ向かった
僕らがロビーへ到着すると既に皆は集まっていた
そして席に着いたと同時に汗だくの森間が現れた
それから夕食が運ばれて来た

「パーティー・タァイッ！！」
直木が叫んだ
やかましいが止めても無駄だろう
そう思ったのか誰1人として直木を止めなかった
前菜のサラダが運ばれてくる
「俺はシーザードレッシングにしようかな」
希が言った
「じゃあ僕は和風」
僕が答えきる前に直木が言った
「すいません、俺は4つお願いします、シーザーと和風、それに自家製ドレッシング用と何もかけずに素材その物の味を楽しむ用に」
「かしこまりました」
マルコスさんはそういうとキッチンからさらにサラダを持ってきた
「前菜から飛ばしすぎだけど大丈夫か？」

高山が心配して尋ねる
「愚問だな、お前は肉に何故美味いのか？と聞くのか？」
直木が返す
ちょっとカッコイイと思ってしまった自分が悔しかった
皆がサラダを食べ終わると今度はスープが運ばれてきた
スープはほぼ全員がコーンを選んでいた
彼を除いては
「すいません、俺は３・・・」
言い終わる前に直木の前にスープが３種類置かれた
「どうぞ召し上がれ」
直木はマルコスの気遣いに感動した様子だった
「あ、ありがとうございます」
「美味いな、メインディッシュは何だろう」
普段小食の薄井もこの料理の味には満足そうだ
そしてメインディッシュが運ばれてきた
直木は深呼吸をしてナプキンを付け直すと背筋を伸ばし４つのハンバーグを完璧なマナーで食べ始めた
肉を食べるときの直木は真剣そのものだ
僕はサラダに合わせて和風を頼んだ
「このコース料理そこらへんの飯屋よりうまいぜ」
西村が思わず声を漏らす
「まったくだね、僕も４つイケちゃいそうだ」
高山も同意する
そして皆が食べ終わるとラストのデザートが運ばれてきた
バニラアイスだ
直木は持参したチョコレートソースとハチミツと生クリームをたっぷりとかけて頂いている
僕は付属していたチョコチップをまぶすと頂いた
美味い、まるで舌の上でとろける様だ、って当たり前か
「コレってどこのメーカーのアイスです？」

下岡が思わず質問をした
「こちらの料理は全て手作りとなっています」
マルコスが平然と答える
「凄いアルね！ここに住み着いてもいいアルね！」
カンのこの発言には同意せざるを得ない
食後はしばらく皆で談笑を楽しみ解散となった
今日はとてもいい１日だった
この修学旅行に参加してよかったと思えた
最高に楽しかった、永遠にこの時が続けばいいとさえ思った
事件が起こるまでは

## 第1の殺人　～Ｇｏｏｄ　ｂｙｅ，　Ｍｏｒｉｍａ～

夕食が終わり部屋へ戻ると僕は希を呼んで今日1日のことを語り合っていた
希と2人で話をしている時が一番落ち着くな
僕はそんなことを考えていたがそれも長くは続かなかった
ガシャン！！
何かが割れたような音が鳴り響き僕と希の会話は中断されたのだ
「なんだ？」
希が不満そうな顔で言った
「ちょっと見てくる」
希はそう言うと部屋を出て行った
「僕も行くよ」
僕は希の後を追った
「音は1階からしたようだったな」
希はそういうと1階の部屋を探索し始めたがどこにも異常はない
「誰かの部屋かな？」
僕がそう言うと希もそう思ったらしく、まずは森間の部屋へ向かった
「森間、何かあったのか？」
僕はドア越しに森間へ話しかけたが返事がない
「気にすることではなかったかな」
僕はそう言いながらなんとなくドアノブを回してみると鍵が開いていた
「あっ開いてる」
「森間、入るぞ」
そう言って森間の部屋へ入っていった希はその場で気絶した
なぜならそこには胸にマスクを抱きながら、無残にも顔を原型がわからないくらい切り裂かれている森間和也が逆さに吊るされていたからだ

まるでそれは今は亡きこの館の主人を彷彿とさせるような風貌だった
僕には森間が胸に抱いているマスクが妖しく笑っているように思えた

「う・・・うわあああああああああああ」
僕が叫び声をあげると皆が集まってきた
「どうかなさいましたか？」
「なんだなんだ？」
「う、うげっ」
「さわがしゥボロロロロロロロロロロロロロ」
「も・・・森間・・・」
皆は唖然と森間の死体を見つめていた
すると今にも泣き出しそうな顔をした高山のポケットから紙が滑り落ちた
”コンヤ　コノナカノ　ダレカガ　シヌ”
あのメモだった

## 犯人はこの中にいる

「このメモはいたずらなんかじゃなかったんだ！」
高山が発狂する
「落ち着け！」
下岡が高山を押さえつけるが逆に殴られダウンした
「問題は誰が殺したか、ってことだろ？」
西村が言った
「その通りアル、そのメモが置かれていた時の状況から振り返るアル」
カンがそう言うと高山は語りだした
「館へ入った後各自の部屋割が教えられたろ？僕が自分の部屋へ入るとドアのそばにこのメモが落ちていたんだ」
高山は机の上の例のメモを指差した
「まてよ、鍵は閉まっていたよな？」
下岡が身を乗り出す
「うん」
高山が頷く
「ということは、マルコスしかメモを中に入れることはできなかったはずだ！犯人は・・・」
希が下岡の台詞を制した
「それはどうかな」
カンが続けた
「メモくらいドアの下の隙間から入れられるアル、それに館に着いた時は皆テンションが上がっていたからそのどさくさに紛れてメモを入れるくらいなら誰にでもできたアル」
「ま、まあな、今のはお前らを試したのさ」
下岡がほざく
「食後のアリバイについては、各自が部屋に戻っていたから誰も証

明はできないな」
西村はそう言ったが僕は納得できなかった
「僕と希は一緒にいたぞ！お前だって！」
僕の反論を否定したのは意外にも希だった
「俺とお前がグルという可能性もあるから証明はできないんだよ、
高山と西村の場合も同じだ」
僕は唸った
「お話の途中失礼ですが・・・」
いつの間にかこの場にいたマルコスが言った
「森間様が持っていた仮面、あれはロビーに飾ってあった3組の仮面の1つでございます」
「それがどうかしたのか？」
直木がもっともな質問をした
「はい、ほかの2つもなくなっているのです」
僕はそう言ったマルコスが不安そうな顔をしているようにも微笑しているようにも見えた
「何か関連性はありそうだが、今のところは不明だな」
薄井がでしゃばる
「つまりだ、俺が言いたいのはこの無人島の中の館で人が死んだ、密室の中の密室で人が死んだということだ」
希が言った
「部外者はいない、この島にいるのは俺たちだけだ」
「ま・・・まさか・・・」
高山が膝をつく
「そう、犯人はこの中にいる！」
希が叫んだ
キマった
まるでこの場が希のために用意された1シーンのようだ
まるで希を中心にこの場面が回っているような
だてに髪の毛は回っていない

希は続けた
「森間を検死したマルコスに聞いたんだが、森間は後ろから殴られていて後頭部の右側が潰れていたんだ、直接の死因はそれさ」
「気持ち悪いな、だからなんだよ？」
直木が毒づく
「つまり・・・犯人は右利きってことさ！」
「な・・・なるほど！」
僕は思わず声を上げる
「うん、でもここにいる全員右利きアルよ」
カンのその言葉を最後に今日はお開きとなった

## スティール・トーク×フード

僕は眠れる気がしなかった
それもそうだ
人が死んだんだ
僕はホットミルクでも飲もうとキッチンへ向かうことにした
ロビーの前を通ると人影が見えたのでとっさに身構えた
カンだ
一体何をしているのだろう
何かを調べているのか、探しているのか
僕は気づかれないように影から見ていた
「カン様、用事とは一体なんでしょう？」
奥の影からマルコスが現れた
「しらばっくれるなアル、仕掛けだらけのこの館、それにあの仮面・・・お前は何か知っているアルね？」
カンは鋭い口調でマルコスを追求した
「お気づきになられましたか」
マルコスは観念したように語りだした
「この館の仕掛けはご主人様が晩年みるようになった悪霊から逃げるための物でございます、遺書に従ってそのまま残してあるのです」
「続けるアル」
メモを取りながらカンが言った
「全ての仕掛けを把握しているのはご主人様のみで、私はほんの一部しか知りません」
「何故黙っていたアル？」
「皆様の楽しい修学旅行を台無しにしてしまうかと思いまして」
「ふん、あの仮面について教えるアル」
「あの仮面はご主人様が特に大切にしていたものでございます、あの仮面を着けた者は死んでしまうと言われています」

「違う、あの仮面と森間の死の関連性を教えろと言ったアル」
「それは私にはわかりません、もしかしたらあの仮面の呪い・・・かもしれませんね」
そしてしばらく沈黙が続いた
僕は物陰から耳を澄ましてこのやりとりを聞いていた
「それでは失礼します」
マルコスはそういうとロビーを去って行った
「ふぅ・・・そこにいるのはわかってる、出てくるアル」
ため息をついたカンが言った
僕が観念して出て行こうとするとほかの影が現れた
「ちっ違うんだ！聞くつもりはなかった！ただ俺は夜食を食いに来ただけなんだ！」
それは直木だった
「別に聞かれて困るような話はしてないアル、おやすみアル」
そう言うとカンは自室へ戻って行った
「俺はまだ食い足りんから寝ないけどな」
直木はキッチンへと姿を消した
僕はミルクを飲む気が失せてしまったので部屋へ戻ることにした
西村の部屋の前を通ると声が聞こえた
「砲撃当てんなコラ！」
そして夜は更けていった

## 2日目

「皆聞くアル！」
朝食を食べ終わるとカンが言った
「この館には奇妙な仕掛けが沢山あるアル！」
「な、なんだって？」
「どういうこと？」
「意味がわからん」
皆困惑しているようだ
「ふん、俺以外にも気づいている奴がいたとはな」
下岡がドヤ顔で話に割り込んできた
「どうやら1部屋に1つ仕掛けがあるみたいアル、僕の部屋には覗き穴があったアル」
「俺の部屋はシャワーがら熱湯がでる仕掛けだったぜ」
下岡が顔面をさすりながら言った
「これから皆の部屋の仕掛けを調べたいアル、抜け穴なんかがあったら危険アルからね」
カンがそういうと皆納得した
「じゃあ俺の部屋から頼む！」
まずは直木の部屋から調べることになった
直木の部屋へ入ると異臭がした
それもそうだ
食べカスだらけだからな
「これアルね」
カンが壁に掛けてある絵画をずらすと後ろにボタンがあった
「お、押してみるか？」
そう直木が言うと高山が止めた
「爆発でもしたらどうすんだ！絶対に止めろ！」
「次は俺の部屋をお願いしたい」

薄井が名乗り出ると皆部屋から出た
僕は皆がこちらを見ていないことを確認するとこっそりボタンを押してみた
しかし何も起こらない
まあ、こんなもんか
僕らは薄井の部屋へ向かった
「何か見つかったか？」
薄井が不安そうに尋ねる
薄井の部屋はなかなか奇麗に整頓してあった
「この電灯、傘をずらすと文字が浮かび上がるぜ」
希が仕掛けを発見したようだ
しかしその文字はどうやらこの館の歴史を記したものらしかった
「森間の部屋はどんな仕掛けなんだろうな」
ふと西村がそんなことを言った
「あいつの部屋はドアの横に小さい抜け穴があったアル、犯人はきっとそこから入ったアルね」
みんなの顔が引きつるのがわかった
ようやく自分の身に危険が迫っているということが実感できたようだ
それと同時に雨が降り出したようだ
嵐と言ったほうがいいかもしれない
ピカッ
「ひぃっ」
高山が情けない声を挙げる
雷の音に驚いたらしい
「これはしばらく止みそうにありませんね・・・」
マルコスが言った
次は僕の部屋を見ることになった
「この本棚・・・」
カンがそう言って本棚をずらすとそこには扉があった
どうやら隣の部屋と繋がっているらしい

隣の部屋は希だ
確か希の部屋のこの位置にも本棚があったな
次は高山の部屋だ
「この部屋は特に何もないようだな」
希が言った
「そうみたいアルね」
カンも頷く
「ほ、ほほ本当にないね！？大丈夫だね！？」
高山が何度も確認する
まったくこのビビりは世話が焼ける
次は西村の部屋だ
「実は俺は仕掛け見つけてたんだよね」
西村はそういうと部屋のシャンデリアを下に引っ張った
すると浴室の天井が下りてきて屋根裏への階段ができた
「どうやら倉庫みたいだぜ、お宝沢山ってかんじ」
西村が軽く答える
一応皆で倉庫を確認したがとくに怪しいものなどはなかった
「私の部屋は管理人なので何もなさそうです」
マルコスがそう言うと下岡が言った
「シャワーの温度には気をつけたほうがいい」
僕らは全ての部屋を調べたのち解散した
僕がロビーに置いてある森間が抱いていた仮面を手に取ったその時だった
直木の悲鳴が聞こえた
「うわあああああああああああああああ」
「どうしたんだ！？」
「何事だ！？」
「大丈夫か！？」
僕らは二階にある直木の部屋へ駆け込んだ
直木の部屋は・・・

水浸しだった
直木の部屋には天井がなく豪雨がそのまま部屋を直撃しているのだ
「な、なんだこれは・・・」
放心状態の直木が膝をつく
「どうやらこの部屋の仕掛けのようだな、このボタンを押すと天井が開閉するのさ」
希がそう言いながらボタンを押すと天井は閉まって行った
「誰かがボタンを押したようだな」
薄井がそう言うと直木が暴れだした
「お陰で食料が水浸しだ！殺してやる！」
「おちつけ直木、食べ物ならキッチンにあるじゃないか、犯人探しなんてやめよう」
僕は直木をなだめると部屋を後にした

## ノット・バット・ゼアー

そろそろ昼食の時間だ
希を部屋に呼びに行こうとした時僕は重要なことを思い出した
緊急ボート！
この騒ぎですっかり忘れていたけどここには緊急ボートがあるんだ！
逃げ出せるじゃないか！
希もマルコスもすっかり忘れていたみたいだな
僕は嵐も気にせず急いでボート乗り場に向かった
あった！
僕がボートに乗ろうと身を乗り出したそのとき後頭部に違和感を感じた
「ん？」
不思議に思い後頭部を触ってみるとなんだかヌルヌルと温かい物がついている
これは？
なんだ・・・？
僕は遠のく意識の中
水中を漂っているという感覚を感じた
そして

俺は昼食のために食堂に集まったがその時閃いてしまった
「そうだ！」
俺は思わず大きな声を挙げてしまった
「なんだよ天パ」
直木が不機嫌そうに尋ねる
「ボートだよ！緊急ボートがあるんだよ！」
俺がそういうと皆驚いたようだった
「なんだって！？」

下岡も俺に負けずに声を張り上げる
「本当ですかマルコスさん！？」
薄井がマルコスに尋ねるとマルコスはあっさりと答えた
「はい」
「なぜもっと早く言わないアル！」
カンも驚いているようだ
「ボートは1人乗りですし、この嵐ですので」
マルコスが不気味な笑みを浮かべながら答えた
「とにかく！ボートへ向かうぞ！」
俺はそういうと嵐も気にせず館を飛び出した
1人でも逃げ出せれば助けが呼べる
そうすれば助かる！
この悪夢ともおさらばだ！
俺はそう思っていたが考えが甘かったようだ
ボートが遠く沖に流されていたのだ
カンが膝をつく
「ないアル・・・」
どっちだよ
「こんなボロいロープで繋いでいるから流されるんだろう！」
下岡がマルコスに掴みかかる
「待て、ロープの切り口を見ろ、ボロくて千切れたなら先がボロボロなはずだがこいつは何か鋭利なもので切られたようだ、さて誰の仕業かな・・・」
キマったぜ

そこに気づくとはさすが希だ
なかなか頭が回る奴だ、だてに髪の毛は回ってない
「しょうがないアル、館に戻るアル」
僕のその言葉に皆は大人しく従った
「そういえば、田熊の姿が見えないけど」

高山が言った
「そういえば、部屋にもいなかったな」
希も知らないようだ
「危険だ！あれだけ1人になるなと言ったのに！」
下岡が慌てふためく
僕らは急いで館に戻ると田熊の姿を探したが彼の姿はどこにもなかった
館内をくまなく探したが痕跡1つ見つけることは出来なかった
「一体どこにいったアル・・・」
僕は思わず呟いた
「まさかアイツはもう既にこの世に・・・」
薄井が涙目になる
「その逆・・・かもな」
西村が怪しい笑みを浮かべた
「ど、どういう意味だ！」
希が西村に掴みかかった
「言った通りの意味だよ、事実アイツは姿を見せない、もし死んだなら死体があってもいいはずだろ？」
西村の冷静な反撃に希は怒りを隠せないようだった
「貴様・・・！」
「まあまあ、2人とも落ち着きなっボゲッ」
下岡が割って入ったが希のアッパーカットに1発KOを喰らってしまった
「落ち着くアル、田熊が犯人ということは恐らくないアル」
僕は言った
「なんだって？」
西村が僕を見る
「田熊の持ち物は手がつけられてなかったアル、身を隠すのに必要最低限の物さえ置いたままだったアル、だからおそらく田熊はいきなり・・・」

僕はそれ以上言うことができなかった
「ふん、ごちそーさん」
西村はそう言うと部屋へ戻ってしまった
「カン・・・サンキュ・・・」
希もそう言うと部屋へ戻って行った
「田熊までやられた・・・犯人は一体誰なんだ！」
高山が机に拳を叩きつけた
「落ち着くアル、今は自分の身を守ることが先決アル、絶対に1人になっちゃダメアル」
そして僕らは下岡1人をロビーに残し解散した

夕食は昼食が遅めだったので食べたい奴だけが自炊して食べることになった
僕がふとロビーの前を通ると直木が1人夕食をほおばっていた
何故僕が部屋にいないのかというと1つ聞きたいことがあってね
犯人はほぼ確実に僕らの中にいる
今現在生き残っているのは希、薄井、直木、高山、西村、マルコス、その他
殺されたのが森間、そして恐らく田熊
僕は奴を見つけた
「あんたに聞きたい事があるアル、部屋に連れて行ってほしいアル」
そう言うと奴はあっさりと部屋へ入れてくれた
「あんたにだけ聞いてないことがあったアル、ちょっと部屋を調べさせてもらうアルよ」
僕はそう言うと部屋を調べ始めた
こいつを犯人と決めつけて部屋に入ったのにこいつに背を向けた事が僕の一生の不覚だった
僕は頭を押さえて倒れこんだ
「や・・・はりアンタが・・・伝えるアル・・・誰かに伝え」
僕が最後に見たのは奴がナイフを振り下ろす瞬間だった

「うぐっ！」
俺はノドに詰まったチキンをシチューで流し込むと一息ついた
「ふぅ・・・」
最終日の打ち上げで食う予定だった七面鳥・・・美味かったぜ
問題はどうやってこの骨を隠すかだな
まあ、それはメインディッシュを食ってから考えるとするか
前菜の七面鳥はなかなかイケたがお次はどうかな

「当てろよ！」
「この槍タイミング難しいんだって！」
そして2日目の夜は過ぎて行った

## 3日目

「よっ希っ」
俺がロビーに入ると薄井が挨拶をしてきた
薄井と馴れ合うような気分じゃない俺はそれをシカトし席に着いた
田熊の行方は未だにわかっていない
田熊・・・お前は一体どこにいるんだ？
「あれ、珍しいなカンは寝坊か？」
まだ食事の挨拶をしていないにも関わらず直木がフレンチトーストを食べながら言った
正確にはチョコレートでフレンチトーストとハチミツと生クリームを挟んだチョコサンドだが
「俺、呼んできます」
俺はそう言うとロビーから出た
とてもじゃないが食欲なんて出なかった
カンの部屋につくとまず名前を呼んだが返事がない
ドアノブを回すと鍵はかかっていなかった
俺はまさかと思い身構えドアを思い切り開け放った
しかしカンの部屋には何もなかった
カンまでが姿を消してしまったようだ
俺は気が遠くなりそうだったが何とか深呼吸をすると気持ちを落ち着かせた
今のところこの殺人や失踪に関連性はない
ということは犯人は俺らを皆殺しにするつもりなのかもしれない
何だか俺は無性に腹が立ってきた
腹が立つと今度は急に食欲が湧いてきた
腹が減っては戦はできぬ・・・か
よっしゃ、食って気分転換でもするか
それから田熊とカンを見つけて犯人を突き止めてやる！

俺が食堂へ戻ると皿が空になっていた
直木のほうを見ると慌てて眼をそらされた
このデブ・・・

希がカンがいないと言うことを一通り説明し終わると俺は席を立った
「先生、どこにいくんですか？」
高山が尋ねる
「俺の生徒が失踪したんだ、じっとしていられるか！」
俺はそういうとロビーを飛び出した
とは言っても奴らがいそうな場所の見当なんてまったくない
まあ、そんなことはどうでもいいんだ
あと1日明日になれば迎えのボートが来る
それまで何としてでも生き残らなければならない
俺だけでも生きて帰らなければ
「なんてことだ！！」
そのときキッチンのほうからマルコスの叫び声が聞こえた
俺は急いでキッチンへ駆けつけると冷蔵庫の前で膝をついているマルコスがいた
「あ・・・あ・・・」
マルコスは何かを言おうとしているようだが言葉になっていない
一体どうしたというんだ？
俺は意を決して冷蔵庫の中を覗き込んだ
・・・空だ
「七面鳥が・・・七面鳥がなくなってる！」
マルコスが叫んだ
「は？」
俺は唖然とした
「最終日のサプライズメニューだったのに・・・」
マルコスはかなり落ち込んでいるようだった
どうでもいい

まてよ？
この七面鳥とカンの失踪は何か関係があるのでは？
まさか・・・
カンのやつ七面鳥を持ち逃げしたのか？
いやまて、直木ならまだしもカンがそんなことをするか？
ありえなくはないか・・・
いやでも・・・
俺がそんな推理をしていると直木の怒鳴り声が聞こえた
俺は直木の部屋のある二階へ向かうと自室のドアの前で直木が怒鳴っていた
「おいマルコス！なんだよこの部屋！水浸しのあとは異臭か！？」
集まってきた皆も思わず鼻を覆っている
なんだこの臭いは？
「お前の汗の臭いじゃねーの？」
西村が直木を挑発する
「何だと！？」
直木が西村を睨みつける
「まあまあ、落ちつけよ、空気を入れ替えればいいだけだろ、お前の部屋には最適な仕掛けがあるんだから」
そう言って直木の部屋の天井を開けた希はその場で気絶した
何故なら開かれた天井からは血だらけになったカンが落ちてきたからだ
森間のようにあのマスクを顔につけながら・・・
俺は腹の底から何かが込み上げてくるのを感じた
これは怒りか？
悲しみか？
哀れみか？
いや違うこれは・・・
「ウボロロロロロロロロロロロロロロロ」

下岡がゲロりさらにこの場の異臭を悪化させた
やれやれだ
「死体の処理はマルコスに任せよう、下手にいじらないほうがいい」
俺はそう言うと気絶した希を抱えロビーへ運んだ
「西村・・・俺らどうなるの・・・？」
高山が不安そうな顔で見つめる
「さあな」
俺はそう言うと考えた
あのカンがやられたとなると敵は相当な切れ者だ
俺は何かを感じカンの乗っていた天井の上を調べることにした
皆は食堂に集まっているから安全だしな
俺は屋上へでると直木の部屋の上を探した
血の跡があったので場所はすぐに分かった
この出血からしてトドメはここで刺したようだな
こんな所に置いたということはすぐに発見されることを狙ったのか？
そうならなぜ田熊の死体は見つからないんだ
まさか、本当に田熊が・・・？
「ん？」
そのとき俺は何かを見つけた
これは・・・ダイイングメッセージか！？
Ｖ　Ｖ
小さくＶという字が２つ書かれているようだった
血で書かれていることからもカンが書いたということは間違いないな
これが意味することは一体なんだ？
そのとき天井が、いや床がいきなり開き始めた
「うおっ」
俺はバランスを崩し危うくカンのように落下しそうになった
「何だ？」
部屋を覗くと誰かが走り去るのが見えた
「待て！」

俺はそういうと急いで直木の部屋の前に走ったが既に誰もいなかった
俺を殺そうとした・・・
俺がロビーへ戻ると皆集まっていた
俺がキッチンを見るとマルコスがちょうど昼食を運んできたところだった
一体誰が俺を・・・？
席を立ったものはいないようだ、やはり田熊・・・
俺はそう言うと席について食事をしたが何か違和感を感じた
希も同じことを思ったらしい
「何か・・・この飯いつもと違うな・・・」
この違和感は一体？

「Vが2つ・・・か」
西村が見つけたのは間違いなくダイイングメッセージだろう
俺は部屋に戻ると西村が食後に話したことを思い出していた
田熊がいない部屋か・・・なんだか寂しい気がするな
俺は気分転換に顔を洗って髪の毛をセットすると外の空気を吸いに行った
あのボート乗り場を探索してみよう
何か見つかるかもしれない
俺が玄関を出るとそこには下岡がいた
「おう希、お前も気分転換か」
「はい」
俺は誰も信じられなくなっていた
こいつが犯人かもしれないんだ
探るような眼で下岡を見ていると下岡が言った
「気分転換もいいが、まずはそのボサボサの頭をなんとかしろ」
俺はそれをシカトするとボート乗り場へ向かった
しかし何も見つからなかった
それもそうか

あの嵐だ
証拠なんて全部流されてしまっているに決まっている
俺が引き返そうとした時岩陰に何かを見つけた
「ん？こ、これは・・・」
田熊の学生証だった
田熊はここに来ていたのか
何故これがここに・・・？
「ま・・・まさか田熊・・・」
俺の頭に嫌なシナリオがよぎった
あいつはここで殺されて海へ・・・
いや、そんなはずはない
あいつは生きているに決まっている
そうに決まっている
俺はそれから部屋へ戻るとベッドへ倒れこんだ

## エブリワン・シンキング

中村希様
俺はそう書かれている招待状を見つめた
何でこんなことに・・
じっとしていても何も始まらないので、俺は今回の事件を最初から振り返ることにした
まずは第1の殺人
森間の死からだ
あいつが殺されたのは1日目の夜、食後だ
食後は各自部屋に戻ったから誰もアリバイはない
顔を切り裂かれていてマスクと共に俺が発見した
第2の殺人の犠牲者はカンだ
直木の天井上で殺されていたのを俺が発見した
カンも森間同様マスクを身に着けていた
カンがいた天井上にはダイイングメッセージらしきものが残されていたが意味はさっぱりわからない
VV・・・これには一体どんなメッセージが・・・
そしてその後ボート乗り場に行きこれを見つけた
俺は田熊の学生証を見つめた
そのとき俺は気づいた
犠牲者の2人が持っていたあのマスクは3組だ
そのうちの2つが死体と共に見つかっている
この流れからして3つ目が見つかるのは・・・
まさか殺人はまだ終わっていない・・・!?

俺はマスクの角度を鏡で入念に直すと散歩に出かけることにした
一体この館で何が起こっているというんだ?
森間だけじゃなくカンまでやられるなんて・・・

1人じゃ危険だな
直木でも誘ってあいつの意見を聞くとするか

俺は夕食のメニューを想像していた
ここの食事は最高だったが今日の昼飯は何で冷凍食品だったんだ？
マルコスもさすがに俺が食いすぎるから料理が面倒くさくなったのかな
そうならそれは困ったな
彼の料理は一流だ
今の俺の心を落ち着かせてくれるのは彼の料理しかない
気分転換にキッチンで何か食べるとするか
いや、それもまずいな
七面鳥を食ったことがバレているようだからな
どうしたものか・・・
その時部屋のドアが勢いよく叩かれた
俺は硬直した
「だっ誰だ！」
「よっ」
薄井のようだ
俺は食べていたヨウカンを机に置くと隣にあったバターナイフを構えた
「何のようだ？」
「散歩でもどうかと思って」
俺が問いかけると薄井は答えた
こいつが犯人かもしれないんだ
探りを入れてみるか
俺はバターナイフを隠し持つと扉を開け薄井の散歩に付き合うことにした
「おいっ2死かよ！」

高山が叫ぶ
「悪ぃ」
俺は謝ったがゲームには集中できないでいた
昼食を食べたときの違和感がずっと気になっていた
この違和感は何か重要なことな気がしてならない
それにカンの残したＶＶというメッセージの意味も分からないままだ・・・
犯人は一体誰なんだ？
「あっそっち行ったよ！」
俺は３死した
もはや高山の罵声も耳に入らなかった

次は俺かもしれない・・・
犯人は俺らを皆殺しにするんだ！
落ち着け俺！
シャワーでも浴びよう
いやダメだ！
俺は最初に熱湯で殺されかけてるんだ
犯人は殺し損ねた相手をそのままにしておくような奴か？
いや違う
きっと今にも俺を殺しにかかってくるに違いない
今もドアの向こうで俺の様子を伺っているかもしれないんだ・・・
そのときドアの向こうから声がした
「ひぃぃ！？」
思わずちびる
「先生夕食ですよ」
希だった
「わわかった、先に行っていてくれ」
俺はパンツを履き替えるとロビーへと向かった

私は料理を作り終えるとため息をついた
「ふう・・・」
ずいぶんと楽になりましたね
何せ人数が3人も減ったんだから
さてそろそろ皆さんが集まって来るころだ
「マルコスさんこんばんはー」
ロビーにはいつもの通り薄井が一番に入ってきた
さて、ディナー・タイムを始めるとしますか

**TVD**

俺はポテトをつつきながら考えた
どうも昼食の違和感が気になる
あの違和感は何だったんだ？
「あれ？」
ふと皿を見ると俺のポテトがなくなっていた
おかしいな
あと3つ残っていたはずだが
隣を見ると直木があらかさまに目をそらした
「おい！」
俺は今までのストレスが溜まっていたこともあり思わず直木に掴みかかった
「びえっ」
直木が情けない声をあげる
「てめーいいかげんにしろ！」
俺が怒鳴ると皆唖然としていた
「ごめんよ、だって今日の昼食は冷凍食品でイマイチだったから腹が減って」
直木がぐずる
冷凍・・・食品・・・
そうかあの時感じた違和感はこれだったんだ
どうりで何か作られた味という気がしたわけだ
「のっ希、落ち着け」
高山が今更止めに入った
「おう・・・」
俺は大人しく席に着くとまた考えた
なぜ冷食だったんだ？
そりゃ毎回毎回大量の飯を作っていたら手も抜きたくなるだろうけど

それに加えあのダイイングメッセージの意味は一体
Vが2つ・・・合わせてW・・・？
犯人は2人いるのか・・・？
いや何か違う気がする、一体どんな意味が・・・
「ったくこれだから天パは嫌なんだよ・・・」
隣で直木が呟いた
「んだと！」
俺は直木に掴みかかった
「ぶひぇ」
直木が情けない声をあげる
「もう我慢ならねえ！表へ出ろ！デブ！」
俺は再び怒鳴った
「て・・・天パが調子に乗るなよ・・・！」
直木がぐずる
「ああ！？もう一度言ってみろ！」
俺はさらに直木を威嚇した
「髪の毛がクルクル回ってるって言ったんだよハゲ！」
直木はそう言うと俺に殴りかかってきた
俺はそれを華麗に避けると直木の腹にカウンターパンチを食らわせ
1発KOをかました
というイメージの中床に崩れ落ちた
薄れゆく意識の中直木が俺の飯を平らげるのが目に入った

目が覚めるとそこは俺の部屋だった
横には濡れタオルを持った高山がいた
いつもならこの役は田熊がしてくれたもんだがな
俺が起き上がると高山が止めに入った
「おいおい、まだじっとしてなきゃダメだ」
「大丈夫だ、それよりも皆一緒にいなくて大丈夫なのか？」
俺の心配をよそに高山は軽かった

「大丈夫じゃない？じゃ、俺はロビーに戻るから安静にな」
「おう、サンキュ」
高山が部屋を出ていくと俺は鍵をかけ横になった
畜生頬が痛む
あのデブ思い切り殴りやがって
髪の毛が回っているだと？
おおきなお世話だ
俺が一服しようと好物のトマトジュースを鞄から取り出すと背後でドアノブを回す音がした
振り向くと誰かがドアノブを激しく回していた
俺は硬直した
「誰だ？」
返事はない
すると今度はドアノブに体当たりをしているようだった
俺は急いで机やイスをドアの前に積んだ
これでもう安心だろう
俺がそう思ったのもつかの間ドアから包丁の先が突き出てきた
そして何度もドアに包丁が突きたてられる
俺は何も出来ずそれを見守っていた
包丁によって出来た小さな穴から光が差し込んできた
するとその穴の向こうに目が見えた
目玉をギョロギョロと動かしこちらの様子を伺っているようだ
俺は手元にあったペンを握りしめるとその穴に向かって突き刺した
手ごたえは・・・なかった
俺は崩れ落ちた
頭上では包丁で穴を広げる音が鳴り響いていた
俺は気絶した希を高山が運ぶのを見送っていた
「いくらなんでもやりすぎだろ」
俺が直木に言うと直木はガムシロに角砂糖を溶かしながら答えた

「ふんっ」
やれやれだ
俺は食後の紅茶を飲みながら一息ついた
「おや、西村様砂糖は入れないのですか？」
マルコスが話しかけてきた
「ああ、俺は無糖派なんでね」
俺が答えるとマルコスが言った
「この紅茶は砂糖を入れたほうが味が引き立つのですよ」
「はあ」
俺はしぶしぶ１つ角砂糖を紅茶に入れた
直木があれだけ入れているんだからその通りなのだろう
まあアイツが飲んでいるのは紅茶じゃないけどな
それにしても直木のやつ希に天パだとか髪の毛が回ってるだとか言うようになったな
「あ、俺も西村と同じ紅茶でお願いします」
希の部屋から戻ってきた高山が言った
まったく、お気楽なもんだぜ
こっちは謎解きで忙しいってのに飯やら天パの話やら・・・
俺はそのときあのダイイングメッセージの意味が分かってしまった
俺は希にそれを知らせようと立ち上がった瞬間目の前が歪み膝をついた
頭が・・・身体が重い・・・ダメだ立ち上がれない・・・
早く希に知らせないと・・・
知ら・・・

## ラストバトル

俺は薄れゆく意識の中思った
ＶＶ
Ｖが２つ
これはＶが２ではなかったんだ
そうこれは１つの文字だ
ただしＷではない
希の天パが俺にヒントをくれた
逆だったんだ
くるくる回ってしまっていたんだ
これの意味はＭ
つまり犯人は・・・
「あれ・・・なんだか眠く・・・・西村ぁ・・・」
直木はそう言うとフラフラと歩き出し俺の上に倒れこんできた
「ゲェッ」
俺は直木のボディープレスを直に食らってしまった
「いってぇ・・・ん？」
直木のボディープレスを食らい胃の中の物を吐き出したお陰で少しは意識がまともになったらしい
俺は直木をやっとの思いでどかすと立ち上がった
希が危ない！

頭上を見上げると穴はだいぶ大きくなっていた
この空間には包丁でドアを削る音だけが鳴り響いていた
もう穴は十分大きくしたらしく扉の向こうの人影はドアに体当たりをしてきた
ドアが壊れるのも時間の問題か・・・
田熊、お前に会いに行くぜ

俺は覚悟を決めた
そのとき声がした
「の・・・み・・・ぞみ・・・天パ！！」
俺は起き上がった
ドアの向こうには西村がいた
「大丈夫か！ここを開けてくれ！」
俺がドアを開けると西村は俺を引っ張って走り出した
走りながら西村はダイイングメッセージの意味、冷凍食品の意味を教えてくれた
食事が冷凍食品だったのは西村を殺そうとしたために調理時間を短縮せざるをえなかったためだ
そして奴は皆に睡眠薬を盛った
今館内にいるのは俺と西村と奴の3人だけだ
「くそっ、見失った！」
西村が壁を殴る
「まあいい、犯人はわかったんだ、皆でまとまっていよう」
俺の提案を西村は受け入れるとロビーへと向かった
ロビーへ向かうとそこには身体を縛られた皆がの姿があった
「ふふ、ようやく来ましたか」
不気味な笑みを浮かべたマルコスがそこにいた
「クソ野郎・・・」
西村が殴りかかる
「おっと、おかしな真似はしないことです、こいつのノドが赤く染まりますよ」
マルコスはそう言うと下岡に馬乗りになりノドにナイフをつきつけたそして別の手で下岡を殴り飛ばした
「もげっ」
下岡は目を覚ましたが状況を理解できていないようだ
「下岡！」
俺が思わず踏み込むとマルコスはナイフを下岡のノドにちらつかせた

「びぇぇ・・・」
下岡がちびる
「何故こんなことを・・・」
西村が拳を握りしめる
「理由なんてありませんよ、暇つぶしです」
マルコスが平然と答える
「ふっ・・・暇つぶしか、笑わせるな！お前は人の命を何だと思ってやがる！！」
マルコスの下で下岡が怒鳴った
しょんべんくさい
「黙ってなさい」
マルコスはそう言うと下岡の後頭部をナイフの柄で殴り気絶させた
「さて希様、西村様をこれで縛ってもらいましょうか」
そう言うとマルコスはこちらへロープを投げつけた
俺は何も言わず西村を縛りあげた
「これでいいだろう」
俺が縛り終わるとマルコスは言った
「よくできました、それではこれで自殺してください」
そういうとマルコスはこちらへ包丁を投げた
俺は包丁を見つめた
「変な気は起こさないことです、こちらには人質がいるのですよ」
俺に選択肢はなかった
俺は自分の腹に包丁を突き立てるとうずくまった
俺の周りに血が広がる
「ふふふ・・・あはははははは」
マルコスの笑い声がロビーに響いた

## フェイク・パーマ

俺は隣で起こった衝撃的光景を呆然と見ていた
赤く広がった血が俺の足元にまで流れてきた
「の・・・天パ・・・！」
俺は血の海へ膝をついた
「まさか本当にやるとはな、うけけ」
マルコスはそう言うと俺へ向き直りナイフを構えた
「さて、次はあなたの番ですね」
じりじりと死が近づいてくるのを俺は感じた
「最後にいい残すこぶっ！」
マルコスはそう言って俺のほうへ倒れ込んだ
俺は何が起こったのか理解できずにいた
「え？」
視線をマルコスの背中へ移すとそこには包丁が突き刺さっていた
「一か八かだったが上手くいったようだな」
希が起き上がると言った
「な、なぜ・・・」
俺が再び呆然としていると希が答えた
「お前が部屋に助けに来る前に飲もうとしたトマトジュースがポケットに入っててね、使わせて貰ったよ」
「さて、こいつはどうするか」
希がマルコスを見ながら言った
「とりあえず、死んではいないようだからどっかに監禁しておくか」
俺の提案で下岡の部屋にマルコスを監禁することになった
「俺は少し疲れた、寝かせてくれ」
俺ははそう言うと皆のいるロビーで眠りこんだ
希も相当疲れていたらしく俺よりも早く眠りについた

どれくらい時間が経ったのだろう
気がつくともう夜が明けていた
もうそろそろ迎えの船が来るころだな
俺は生き残った皆、西村、薄井、直木、高山、下岡を叩き起こすと
ボート乗り場へ向かった
迎えのボートは既に来ていた
「来てるなら、迎えに来いよな」
ピザを食いながらピザ・・・じゃなくて直木が言った
「やっと帰れる！」
高山がボートへ走り寄ろうとした瞬間ボートは爆音をあげて炎上した
「うわっ・・・え？」
薄井は状況を理解出来ていないようだった
薄井だけでなくここにいる全員がそうだったろう
俺はふといやな予感が頭をよぎり下岡の部屋へ走った
鍵はしまっていた
俺は少し安心して鍵を開けると部屋へ入った
しかし、その安心は一瞬のものだった
部屋はもぬけの空だった
「なんだと・・・」
西村はそういうと立ち尽くした
俺は急いで部屋の中を調べた
すると案の定見つかった
「これは・・・クローゼットに抜け穴が・・・」
下岡が膝をついた
「うかつだった・・・この部屋には２つ仕掛けがあったのか・・・」
俺らは殺人鬼が野放しにされた館の中でどうすることもできず怯えていた
「こんなときに何やってんだ！」
俺は思わず薄井の怒鳴り声に驚いて振り向いた

「なにすんだ！」
ゲームを投げ飛ばされた高山が薄井に掴みかかっていた
皆感情を抑えられないようだ
それもそうか、この状況で平常心でいろってほうが難しい
直木もさっきから何かブツブツいいながら9個目の菓子パンを食べている
「こんなときに何やってんだ！」
俺は思わず薄井の怒鳴り声に驚いて二度見した
「うるせ―マスク野郎！」
パンを一口食われた直木が薄井を殴り飛ばした
「いい加減にしろ！」
下岡が怒鳴った
「お前らどうかしてるよ・・・仲間が殺されてさ、その犯人が今もこの館の中にいるかもしれないってときに・・・何でそんなことしてられるの？お前らは仲間が死んだってのに何も思わないわけ？どうなの！？ねえ！答えてよ！みんな！」
「あ、マルコス」
「びぇっ」
西村の冗談にちびった下岡は泣きながらトイレへ駆け込んだ
気がつくと夜が明けていた

## トラブル・ティーチャー

４日目の朝
結局一睡もできなかった
ロビーのソファーに座りながら俺は頭を抱えた
「よっ、西村っ」
薄井が声をかけてきたが俺はそれをシカトしてシャワーを浴びに部屋へ戻った
もちろん、１人では危険なので高山を連れてだ
キッチンの前を通ると、直木が白目を向いて倒れていた
「ど、どうしたんだ！？」
高山が直木に駆け寄ると直木は黒目を向いて叫んだ
「お、終わりだ・・・俺らは全員死ぬんだ！！」
「おちつけ、何があった？」
俺がそう言うと直木は過呼吸気味に話し出した
「しょっ食料が・・・なっないんだよ！つっつついに底を尽きたんだ！おお俺はもう駄目だ・・・先に逝ってる・・・ぜ・・・」
直木はそう言うと眠りに落ちた
「ったく・・・」
俺は直木をソファーに移そうとしたが重すぎたため断念して歩き出した
「言うほどではないけど、食料が尽きたのは問題だな、早く脱出しないと」
高山の言うとおりだ
「今は心のリフレッシュが先決さ」
俺はそう言うと自室のドアを開けた
するとそこには紙切れが落ちていた
「これは・・・」
俺が手に取るとそれにはこう書かれていた

”ショウゴ　ヒトリデ　ソウコ　ニ　コイ　ｂｙ　マルコス”
「ん？何それ」
高山が覗きこもうとしたが俺はそれを隠した
「なんでもないよ、じゃあちょっくら待っててくれ」
俺はそういうとシャワーを浴びにバスルームへと入った

俺はトイレでぼさぼさの頭をくしでとかしていた
となりで薄井が愚痴る
「いくらとかしてもまっすぐにはならんよ、その髪は」
俺がシカトしてヘアアイロンを取り出したその時だった
背後の大便の個室で物音がした
！？
俺たちは硬直した
まさか、マルコス！？
こんな所に隠れていたとはな
俺は深呼吸をすると薄井に耳打ちをした
（ドアを思い切り蹴り破ってくれ、俺がこのデッキブラシで戦う）
（ダメだ、危険だ）
薄井はそう言ったが俺の決意は固かった
（今を逃したらさらに犠牲者がでるかもしれない、そんなことは絶対に許せない）
（・・・わかった、いくぞ）
３
２
１
ドガッ
薄井がドアを蹴り破る
「うおあああああああ」
俺はそう叫ぶとデッキブラシでマルコスを滅多打ちにした
バキドガベキボガグシャボキッ

「はぁ・・・はぁ・・・」
俺は息を切らしながらマルコスから距離をとった
いや、それはマルコスよりも見なれた顔だった
もはや原型は留めていないが
「下岡・・・」
昨日トイレに駆け込んでそのまま寝てしまっていたらしい
俺らは顔面が腫れあがった下岡が気絶していることを確認するとそっとトイレを後にした

正午前
俺がこっそり館を抜け出すと館の中から下岡の絶叫が聞こえた
「びぎゃあああああああああああああああああす」
尋常ではない叫びようだ
マルコスは倉庫にいるはずだが・・・
まさか罠か！？
俺は急いで館の中へ戻った
するとそこには顔面を腫れあがらせた下岡の姿があった
「びしゃい・・・びしゃい・・・びぇ・・・」
下岡が何かを言う
「痛い、痛い、びぇ」
高山が訳す
「一体何があったんだ！？」
俺は下岡の顔面に消毒液をぶっかけながら尋ねた
「チビルチビル！誰ひゃがポイレでねれら俺をバッタムチにしやがっひゃ！」
「しみるしみる、誰かがトイレで寝てた俺を滅多打ちにしやがった」
高山が訳す
マルコスの野郎・・・許せん・・・
「殺されなくてよかったな、いやあ不幸中の幸いってやつだな」
薄井が言った

「その通りだ、マルコスのやつも今回ばかりはドジ踏んだらしい」
希が続いた
俺はみんなが下岡をロビーのソファーで手当てをしている隙に再び外へ出た
時刻は正午を回ろうとしていた

## 救世主×救世主（前書き）

もはや小説の内容を覚えていないので色々矛盾してるかもしれん

## 救世主×救世主

俺は島のはずれにある倉庫の前にいた
意を決して扉を開ける
「来てくれましたか、西村様」
マルコスだ
高い所にある物をとるために置いてあるハシゴに足を組んで偉そうに座っている
「何が目的だ？」
「あなたにお願いがありましてね、難しいことじゃありません」
こいつ何を言うかと思えば
何か企んでいるに違いない
「お願いだと？」
「館に爆弾をしかけました」
「何だと！？」
爆弾！？
館には皆がいる
今爆破されたら・・・
いやまて
爆弾だと？
そんなものをいつ仕掛けた？
つまらん嘘なんぞこきやがって
まあ、ここはこいつの話に乗って目的を探ってみるか
「それで目的は？」
「ここに予備のボートがあります、しかし燃料がなくてね」
なるほどね
「館の中にあるのですが、今取りに行くのは少々難しいので持ってきてもらいたいのですよ」
「嫌だといったら？」

俺がそう言うとマルコスは爆弾のスイッチのようなものを見せつけた
「どうやら私の言うことを信じていないようですね」
「まあな」
俺はそういうとナイフを取り出し構えた
「ポチっとな」
マルコスがボタンを押すと倉庫の外から爆音が鳴り響いた
！？
まさか！
「安心してください、今のは予備です」
「わかった・・・」
俺はそう言うとロビーにあるという燃料をとりに館へ戻った

「びりぶば、ぼんばえボケていったんじゃ」
下岡が話しかけてくる
「西村お前どこへ行ってたんだ」
高山が訳す
「ちょっとな、傷はもう大丈夫なのか？」
俺はそう言って下岡の顔面に触れた
「びぇっ」
すると下岡は痙攣しながら気絶した
どうやら重症らしい
さて、燃料だったな
ロビーには皆いるし、どうやって持ち出すか
「さっき凄い音がしたけど何だったんだ？」
薄井が興奮している
「そういえば裏口のほうから煙があがっていたぜ」
俺がそういうと希が反応した
「マルコスか！？行ってみる価値はあるな」
「俺が下岡をみているから皆で見てきてくれ」
俺がそう言うと皆は館の裏口へと向かった

さて
俺は燃料をもつと倉庫へと走った
「おかえりなさいませ」
マルコスがほほ笑んだ
「ほらよ、さあスイッチを渡せ」
俺がそう言うとマルコスはナイフを構えた
「やはりそうきたか」
俺はそういうとナイフを取り出した
ファイッ！
ゴングが鳴ったような気がした俺はマルコスへ向かって猛ダッシュ
した
しかし俺は何かにつまづき見るも無残に顔面から地面へと突っ込んだ
これは・・・ピアノ線！？
マルコスの野郎セコイ真似を・・・
俺が顔をあげるとマルコスがナイフを振りかぶっていた
終わった・・・何もかも・・・
するとその時倉庫の裏口から何かが飛び込んできた！
ネコジャラシか！？
モップか！？
もずくか！？
いや希だ！！

「あ、ロビーに武器忘れた、お前ら先に行っててくれ」
俺はそういうとロビーに急いで戻った
「ったく、天パでドジとか最悪だな」
後ろから薄井の声が聞こえる
あとでシバく
俺がロビーへ戻ると玄関から外へ出る西村の姿が見えた
あいつ・・・どこへ行くつもりだ？
それに何かを持っていたようだが

「ボンベ、俺象」
ソファーを見ると目覚めたらしい下岡が俺に何か言ってた
俺はそれをシカトすると西村の後を追った
ここは・・・倉庫？
俺は裏口へ回り込むと中の様子をうかがった
あれは・・・マルコス！
グルだったのか？
いや、会話の内容からしてそうではないみたいだ
ナイフ・・・？
戦う気か！？
無事では済まないぞ！
俺がどうすればいいのか考えている間に西村がマルコスへ走り寄った
しかし無様に顔面から地面に突き刺さる
すかさずマルコスが走り寄る
まずい！
そう思うよりも早く身体が動いていた
「ぱあああああああま」
俺は思いっきりマルコスに体当たりをした
つもりだった
マルコスは俺に気づいていたらしく身軽に俺の渾身の一撃をかわした
俺はそのまま顔面から食料棚に突っ込んだ
「ぐぇ・・・」
「おやおや、カッコ悪い」
マルコスはそういうと西村をロープで縛りあげた
次は俺の番だ
俺たちは仲良くロープで縛られ吊るされた
足元には何故か薪が置かれている
「さて、私はそろそろ行くとしますか」
予備のボートに燃料を入れたマルコスが言った
「置き土産にこれをあげましょう」

そう言うとマルコスは俺たちの足元の薪に燃料をかけた
「髪が焦げたら二人仲良くクルクルですね」
マルコスはそう言うと薪に火をつけた
「あっつ！」
西村が揺れる
「それでは・・・」
マルコスがそう言いボートを運び出そうとした瞬間だった！
倉庫の天井が勢いよく破られた！
「うわっ」
3人とも思わずひるむ
そして崩れ落ちるトタン屋根と共に何者かが着地してマルコスに立ちふさがった！
下岡か！？
高山か！？
薄井か！？
いや・・・あれは・・・
田熊だ！！

# ベアー・イズ・バック（前書き）

物語はついに終幕へ

## ベアー・イズ・バック

目の前には死んだと思っていた親友の田熊
俺は何が起こったのかすぐには理解できなかった
それはマルコスや西村も同じようだった
しかしそれは恐らく一瞬だっただろう
「キエーッ！」
すぐにマルコスが田熊に向かって飛びかかる
「田熊後ろ！」
俺の叫びを聞いた田熊はマルコスが振り下ろすナイフを直前でかわして転がった
「田熊！火！火！」
隣で西村が騒ぐ
そういや足元が何だか凄く熱い
「おう」
田熊はそう言うと腰にさしていたペットボトルのふたを開け水を飲んだ
「ふう」
「違うだろ！うあっつ」
「冗談冗談」
田熊はそう言うと火に水を注ぎ消火した
こいつしばらく見ない間に冗談が言えるまでになってやがる
「さて、もういいでしょうか？」
マルコスはそう言うとこちらを睨んだ
「まったく次から次へと邪魔ばかりしてくれますね」
マルコスはそう言うと両手にナイフを掲げこちらへ走ってきた
「たっ田熊！」
俺は思わず叫んだ
田熊はポケットに手を突っ込んでいた

やられた・・・
俺がそう思ったのもつかの間
田熊はポケットから手を抜くとマルコスの顔面に思いっきり砂をぶっかけた！
「ふおっ」
何というダーティープレイ！
突然の奇襲に怯んだマルコスの隙を田熊は見逃さなかった！
これまた腰にさしていた折り畳みナイフでマルコスの脇腹を一突き！
そして崩れ落ちるマルコス
完成を上げる俺と西村

決まったぜ・・・
ボート乗り場で背後から何者かに殴られた僕は今倉庫にいる
あの後海に投げ出された僕は奇跡的にも館からそう遠くない岩場に流れ着いた
それから僕は犯人の裏をかくために独自に調査をしていたわけだ
珍しく倉庫に人が出入りしているから気になって見にきたらこのザマさ
まったく、世話を焼かせるやつらだぜ
「田熊後ろ！」
ん？
希の叫びを聞いて振り返った僕が見たものはナイフを振りかざしたマルコスだった
ちょっと待って高いとこから飛び降りたから足が痺れて、
あっ危なっ
僕は転がるようにしてマルコスのナイフを避けた
危うくくし刺しにされる所だったな・・・
「田熊！火！火！」
えっ？
焦げくさいと思ったら西村と希が火あぶりにされてるじゃないか！

なっ何とかしないと！
どっどうすればいいんだ・・・
待て待て、落ち着くんだ僕、落ち着け
とりあえず水を飲んで落ち着くんだ
僕は震える手で腰にさしていたペットボトルを取り出し水を飲んだ
「ふう」
少しは落ち着いたかな
「違うだろ！ああっつ！」
西村が叫ぶ
ああ、そうか水があったんだ
「冗談冗談」
僕はそう言うと火を消した
そういえばポケットにナイフがあったっけな
早く二人を開放しないと
えーっとあれ、ゴミと砂ばっかりで・・・
「たっ田熊！」
希が再び叫んだ
両手にナイフを持ったマルコスを見た僕は完全に怯んでいた
うっうわわっ！！
とっさにポケットから手を出すと砂がマルコスにぶっかかった
「ふおっ」
マルコスがよろける
水を飲んで落ち着こうと腰からペットボトルを取ろうとした僕がさわった物はもっと固いものだった
ナイフだ！
これで！
「はああ！！！」
目をつぶって突き出したナイフだったが命中したかどうかは目を開けなくても明らかだった
なぜなら僕の手には嫌な感触が直に伝わってきていたからだ

「「やっやった！！」」
希と西村が歓声を上げる

その後僕は希と西村を開放し気絶したマルコスを今度は逃がさないようにしっかりと縛り館へと帰還した
僕はみんなの驚きの反応がどんなものか楽しみだったけどその期待は見事に裏切られてしまった
館の扉を開けてまっさきに飛び込んできたのはみんなが下岡を一喝する罵声だった
それと悪臭
全身に包帯を巻いたミイラのようになった下岡がションベンを漏らしていたのだ
お叱りの内容は傷が痛んで歩けないとは言えションベンを漏らすのはどうたらこうたら
「たっ田熊！おまっ生きて！た！の！」
薄井が何とも言えない反応をしてくれたが僕はそれをシカトするとみんなにボートの存在を教えた
ボートは所々壊れていたのですぐには使えなかったが、それは簡単な修理で何とかなった
そして僕らは島を脱出した
僕が言うのもなんだけどなんだかあっけないラストだったな
そして今思えば長いようで短い修学旅行だった
僕はそんなことを思いながらふと海を眺めた
美しい
もうこの海には海パン一枚の筋肉坊主はいない
飛び跳ねるトビウオを見てはしゃぐ中国人もいない
「ゥボロロロロロロロロロロロロ」
いるのは船に酔ってゲロを吐くミイラ男だ
まったく・・・

## ~forever mask trick~（前書き）

ついに完結

その後何とか陸地に辿りついた僕らはもちろん警察へ向かった
世間にこのことが公表されると僕らの高校は一躍有名になり遂には
共学、廃校の話なんてどこかへ行ってしまった
僕らは何度も警察に呼び出され話を聞かれた
今僕が警察署にいるのはそのためだ
僕は警察が何度も同じ話をするからすっかりうんざりしていた
「はあ・・・」
僕はため息をついてベンチに腰を下ろした
するとこちらに見慣れた奴が近づいてきた
「よう」
直木だ
あの後空腹で栄養失調になった直木は昨日退院したばかりだ
「もう大丈夫なのか？」
「病院食の量が少なすぎてな、味も薄いし、余計に体調が悪くなり
そうだから無理矢理退院したぜ」
やれやれ、相変わらずだな
「そんなことよりさ、あれ聞いたか？」
「ん？何を？」
僕は身を乗り出した
「あの館のことだよ、あの館数十年間誰も住んでいなかったらしい
し、マルコスは国籍のない密入国者だったんだってよ」
「なっなんだって！？第7部マスク・ホテルでギャグ一切なしであ
んなに長々と館のエピソードを話したのに嘘なのかい！？」
僕は思わず立ち上がり大声を出してしまった
周りの人たちが一斉にこちらを見る
「お、おいおい」
直木が座るように勧める

「伏線回収しきれなかったからって・・・」
「ん？何か言ったか？」
「いいや、何でも」
僕がそういうと直木は不思議そうな顔をした
「俺はまだまだ釈放されそうにないぜ」
直木はそう言うと水筒を取り出しとんこつスープを飲みだした
「暇になったら会いに来てやるよ」
僕はそう言うと警察署を後にした
ちょうど署の入口を出た時だった
「おう田熊、ちょうどいいところに来た」
振り返ると西村がいた
腕には子猫を抱いている
「何その猫」
「こいつな、カンが自宅で飼ってた猫なんだ、引き取り手がいないんだがお前どうだ？」
いきなりの提案に僕は驚いた
「うーん、僕の家マンションだから飼えないんだよなあ」
「そうか、それじゃ保健所にもっていくしか・・・」
「わっわかった！引き取るよ！」
「おうそうか、サンキュ、じゃまたな」
西村はそう言うと僕に子猫を押しつけ走り出した
「どうしようこの猫・・・」
僕は途方に暮れていると後ろから車が近づいてきた
「田熊じゃないか」
レンタカーから顔をだしたのは下岡だった
残念ながもう怪我は治ったようだ
「あぁ、こんにちは」
「明日から学校だからちゃんと来いよ」
下岡はそれだけいうとウインクして走り去った
再び歩き出した僕はふと学校近くの廃屋のことを思い出した

あそこならちょっと遠いけどこいつを飼えそうだな
僕はそう言うと子猫を見つめた
名前を考えなくちゃな

翌日
僕は早めに学校についた
「おはっす」
僕が教室にはいると週番の希が黒板を掃除していた
あの事件の後希はストパーをかけた
「おはよう」
僕はそういうと席に着いた
「よっ」
後ろから何かが聞こえた気がした
「おはよー」
その時教室に高山が入ってきた
「いやー学校久しぶりだね！しかも転校生が来るらしいし楽しみ！」
珍しく高山のテンションが高い
僕はほほ笑みながらカバンを開けた
そこに入っていたのはキャットフードだった
これは・・・あ！
タクＭＡＸのエサだ！
あっタクＭＡＸは昨日西村から預けられた子猫ね
僕が時計を見ると学校開始２０分前だった
今からエサをあげにいったら確実に遅刻だ
僕はそっとエサをしまおうとしたがタクＭＡＸのつぶらな瞳が目の前に浮かんだ
「ええい！」
僕はそう言うと駆け出した
学校を抜け出す時に下岡とすれ違った
「おい田熊どこに・・・」

僕はそれをシカトすると廃屋へ急いだ
あの角を曲がればもう少しだ！
「遅刻遅刻ー！」
そのとき見知らぬ女の子がそう叫びながら僕にぶつかってきた
「うわっ」
僕らは正面から衝突し二人とも尻もちをついた
「だっ大丈夫？」
僕はそう言うと女の子に手を差し伸べた
「あ、ありがとう・・・」
「じゃ、僕急いでるから！」
僕はそういうと再び駆け出した
ん？さっきの女の子の制服はうちの高校のと似てたな
廃屋に辿りついた僕はタクＭＡＸの住処となっている段ボールを開けるとキャットフードを差し出した
「ブニャ」
タクＭＡＸは不細工な鳴き声をあげるとキャットフードにがっついた
「おいおい」
僕はその様子をしばらく眺めていたがふと学校のことを思い出した
「しまった！」
再び全力疾走で学校へ向かう僕
もうＨＲは始まってる
けどまだそんなに時間はたっていないはずだ
僕は学校へ飛び込むと靴も履きかえずに教室に向かうとドアを開け放った
「おっおはようございまっ」
下岡と一緒に教卓に立っていたのはさっき僕とぶつかった女の子だった
「きっ君はさっきの！」
「あっさっきの人！」
こうして僕の学園生活が再び幕を上げた

END

## ~forever mask trick~（後書き）

やっと完結しました
非常に長かったです
もう途中で自分で書いた内容忘れちゃうしラストは若干・・・いや
かなり無理矢理な感じだし散々でした
やはり僕は短編のほうが相性いいみたいですね
こうして完結させることができましたし、しばらく小説からは手を
引こうと思います
それでは、ここまで読んでくれて本当にありがとうございました
またどこかで会いましょう

## おまけ・NG集1

第二部・プロローグ
「んん・・・」
目を覚ますと僕はふと時計をみた
もう7時か、そろそろ登校しないとな
「ん？何だこの荷物・・・一体誰・・・」
そこまで呟いた僕は目を見開いた
今日は修学旅行だ！寝坊した！遅刻だ！

第三部・僕の名前は中島田熊
さて、学校に着いたぞ
「おはよう」
担任の下岡だ
「おはようございます」
「お前が最後だぞ、さっさとバスに乗れ」
早めに来たと思ったんだけどな、僕は下岡に促されるままバスへ乗り込みドアを閉めた
あとはバスで海に行くだけだ

第四部・ゲロリスト
僕が後ろを振り向くとそこには朝っぱらから牛丼をつつく直木の姿があった
「食いたいのか？やらねーよ！」
「うるせーデブ！」
僕はそういうと直木に掴みかかった
「一口くらいいいだろ！」
「んだっざっけんなコラ！」
「いい加減にしろ！」

下岡が怒鳴った
「「はぃ・・・」」

音楽を聴いているのがカンだ
「やっぱりハチャトゥリアンはいいアルね～」
「ハチャトゥリアンか、同じソヴィエト３巨匠なら僕はプロコフィエフのほうが好みだな、彼自身が優れたピアニストだったし、その証拠に彼の作品にはピアニストの重要なレパートリーの・・・」
「ここカットするからな？」
希が冷たい口調で言った
「ごめん・・・」

第五部・そして無人島へ～ゲロリスト再来～
顔を真っ青にした下岡が話しかけてきた
「なあ、ビニール袋ない・・・？」
「いやだから持ってな・・・」
そう言いかけた瞬間僕の頭に嫌な予感がよぎった
「薄井！マスク貸せ！！」
「嫌だよ！」
「いいから！」
「やめろ！」
「早くしないと！」
「触んなって！」
「何だとこら！離せ！」
「このクソっあっ」
僕と薄井は海の藻屑となった
船上からは数々の罵声が聞こえてきた

## おまけ・NG集2（前書き）

おわり

## おまけ・NG集2

第6部・仮面館
「おかしいな、執事が出迎えてくれる手筈なんだが」
下岡が困惑していると西村が叫んだ
「たのもーう！誰かいませんかー！」
しかし返事はない
僕は巨大な扉を押したり引いたりしたがびくともしなかった
「困ったな・・・」
僕は再び扉に手をかざし今度は叩いたり持ち上げようとしたりしてみた
「ダメか」
僕は肩を落とした
「しゃーねー帰るか」
西村はそう言うと来た道を戻りだした
「そうするか」
みんなも冷めたらしく次から次へと後に続いた

第7部・マスク・ホテル
ロビーへ向かうと何やら皆が騒いでいた
「どうしたんだ？」
希が聞くと高山が答えた
「どうしたもこうもないよ、見ろよこれ」
高山が差し出したのは1枚のメモのようなものだった
そしてそのメモにはこう書かれていた
”ハンニン　ハ　マルコス”

第8部・食前の思惑
「風がないお前何てただのトカゲなんだよっコラ！」

「剣、尻尾頼む」
「オーケイ」
「うおっ逃げられた！撃退かよ！」
カンが西村の部屋の前を通ると高山と西村の声が聞こえた
「お前があそこで死ぬからだろ！」
「はあ！？お前こそ回復ケチってキャンプまで戻ったろ！」
「んだと！」
「やんのか！」
ほどほどにな
俺はロビーへと向かった

第９部・ディナー・タァイ
「薄井様、なんでしょう？」
「あの、マスクがダメになってしまったんで、よかったら貰えないかと思いまして・・・」
薄気味悪いマルコスさんを前にして今さらながら気が引けてきた
「マスクなら沢山あります、どうぞ」
マルコスさんはそういうと石でできた変わった仮面を俺に差し出した
「え？」
「被ってください、それからこの血を・・・」

第１０部・第１の殺人　～Ｇｏｏｄ　ｂｙｅ，　Ｍｏｒｉｍａ～
皆は唖然と森間の死体を見つめていた
すると今にも泣き出しそうな顔をした高山のポケットから紙が滑り落ちた
”ハンニン　ハ　マルコス”
あのメモだった

第１１部・犯人はこの中にいる
「森間を検死したマルコスに聞いたんだが、森間は後ろから殴られ

ていて後頭部の左側が潰れていたんだ、直接の死因はそれさ」
「気持ち悪いな、だからなんだよ？」
直木が毒づく
「つまり・・・犯人は左利きってことさ！」
「な・・・なるほど！」
僕は思わず声を上げる
「この中で左利きなのは・・・」
僕たちは全員一斉にマルコスを見た

第１２部・スティール・トーク×フード
ロビーの前を通ると人影が見えたのでとっさに身構えた
カンだ
一体何をしているのだろう
何かを調べているのか、探しているのか
僕は気づかれないように影から見ていた
「カン、話って何だ？」
奥の影から希が現れた
「あの・・・その・・・」
カンはうつむいて何かを言おうとしている
「用がないなら帰るけど」
希が帰ろうとしたそのときだった
「ぁ・・・前から・・・好きだったアル・・・／／／」

第１３部・２日目
カンが壁に掛けてある絵画をずらすと後ろにボタンがあった
「お、押してみるか？」
そう直木が言うと高山が止めた
「爆発でもしたらどうすんだ！絶対に止めろ！」
「次は俺の部屋をお願いしたい」
薄井が名乗り出ると皆部屋から出た

僕は皆がこちらを見ていないことを確認するとこっそりボタンを押してみた
その瞬間館は島全体を揺るがしたであろうほどの爆音と衝撃と共に姿を消した

第１４部・ノット・バット・ゼアー
僕は嵐も気にせず急いでボート乗り場に向かった
あった！
僕がボートに乗ろうと身を乗り出したそのとき背後で物音がした
その瞬間僕は身をひるがえし背後からの刺客の攻撃をかわした
そして足を払いダウンをとると袋叩きにした
それからそいつの・・・

第１５部・３日目
「なんてことだ！！」
そのときキッチンのほうからマルコスの叫び声が聞こえた
俺は急いでキッチンへ駆けつけると冷蔵庫の前で膝をついているマルコスがいた
「あ・・・あ・・・」
マルコスは何かを言おうとしているようだが言葉になっていない
一体どうしたというんだ？
俺は意を決して冷蔵庫の中を覗き込んだ
そこには
”おたんじょうびおめでとう”
というチョコプレートが飾られたケーキがあった
「え？」
俺が唖然として振り返るとそこにはクラッカーを持ったみんながいた
「「ハッピーバースデー！！！」」

第１６部・エブリワン・シンキング

VV・・・これには一体どんなメッセージが・・・
まさか！
これは逆さにするんだ！
つまりM！
犯人はマゾなんだ！

第17部・TVD
「ったくこれだから天パは嫌なんだよ・・・」
隣で直木が呟いた
「んだと！」
俺は直木に掴みかかった
「図に乗るな、小童が」
その瞬間俺は手に異常な熱さを感じ直木から手を離した
「コォォ」
直木が手をかざした瞬間俺の周りの空間が歪んだ
そして

第18部・ラストバトル
俺は自分の腹に包丁を突き立てるとうずくまった
俺の周りに血が広がる
「ふふふ・・・あはははははは」
マルコスの笑い声がロビーに響いた
しかしそれもしだいに遠くなり
俺はこと切れた

第19部・フェイク・パーマ
マルコスはそう言って俺のほうへ倒れ込んだ
俺は何が起こったのか理解できずにいた
「え？」
視線をマルコスの後頭部へ移すとそこには深々と包丁が突き刺さっ

ていた
「一か八かだったが上手くいったようだな」
希が起き上がると言った
「終わったな・・・」
俺は差し出された希の手を取ると立ち上がった

第２０部・トラブル・ティーチャー
俺はそう言うと自室のドアを開けた
するとそこには紙切れが落ちていた
「これは・・・」
俺が手に取るとそれにはこう書かれていた
”ホウカゴ　タイイクカン　ノ　ウラニ　キテ　ｂｙ　マルコス”

第２１部・救世主×救世主
倉庫の天井が勢いよく破られた！
「うわっ」
３人とも思わずひるむ
そして崩れ落ちるトタン屋根と共に何者かが着地してマルコスに立ちふさがった！
誰だ！？
高山か！？
薄井か！？
いや・・・あれは・・・
下岡だ！！

第２２部・ベアー・イズ・バック
希の叫びを聞いて振り返った僕が見たものはナイフを振りかざしたマルコスだった
ちょっと待って高いとこから飛び降りたから足の骨が折れて、
あっ危なっ

俺は胸を貫かれ絶命した

第２３部・~ｆｏｒｅｖｅｒ　ｍａｓｋ　ｔｒｉｃｋ~

「こいつな、カンが自宅で飼ってたアナコンダなんだ、引き取り手がいないんだがお前どうだ？」

いきなりの提案に僕は驚いた

「無理」

「そうか、それじゃ保健所にもっていくしか・・・」

「そうして」

僕は再び歩き出した

## おまけ・NG集2（後書き）

おわり

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2700m/

マスク・トリック／ニュー・サイド

2010年10月22日12時17分発行